佳作

一言の勇気

茨城県　日立市立坂本小学校四年　渡辺　眞生

夏休みに入ってからも、連日熱中症警戒アラートが発表されており、私が住んでいる地域でも、救急車のサイレンが鳴りひびいていた日の出来事です。

ジリジリと太陽が照り返す昼頃、母の運転する車で、私は、外出から戻り家に到着する頃、スーパーに立ち寄りました。スーパーの入り口には、ベンチが置いてあり、そこは、ジリジリと太陽の日差しを直にあびる場所なのに、一人の老女が押し車とリュックをかかえ、ベンチに座り込んでいました。私と母は、老女のことが気になったものの、暑さから早くにげたくて、足早にその場を立ち去りました。

少し時間がすぎて、店の入口を見てみると、老女の姿は、ありませんでした。私は母に、

「あのおばあさん、もういないよ。タクシーで帰ったのかなぁ…。」

と問いかけました。すると母は、

「この炎天下の中を歩いてたら、心配だよね。」

と心配そうに答えました。母と私は、ちょうど昼食前ということもあり、早めにスーパーを後にし、家へ向かいました。その日は、家の前の電柱工事で、迂回をしないと家に帰ることができなかったため、ふだんは通らない細い道を通ることにしました。すると、民家の木の下で、スーパーの入り口で見かけた老女が、ぐったりとして、地面に座り込んでいました。

「あっ」と母と私は、同時に声を出しました。車で数十メートル走った所で、母は、

「戻ろうね。」

と言って車を回し、老女の所へ戻り、

「こんにちは、大丈夫ですか？」

と声をかけました。しかし、老女からの返答がありません。私たちは、

「おばあちゃん、おばあちゃん。」

と何度もよびかけると、やっと顔を上げてくれたのですが、真っ赤な顔で、様子が変だったので、民家の方に声をかけて、救急車をよぶことにしました。隊員の方と話していると、熱中症の様子で、このまま木の下に座っていたら命があぶなかったと聞いたとき、スーパーのベンチに座っていた老女に勇気を出して一言何らかの声をかけることが出来ていたら、と後悔しました。

その老女は、どこの誰かも分かりません。しかし、あの時、母が車を回して戻らなかったらと思うと、すごくおそろしい気持ちになりました。「あの時の一言」「勇気」にすごく心があつくなり、感動しました。一言を行動に変えることは、かん単なことではないけれど、その日の体験を忘れないで「一言」と「勇気」を心の中で、大切にしていきたいと思いました。